垂直モザイク社会カナダ・トロントのカリブ海地域出身者の祭り，カリバーナの意味

江　口　信　清

はじめに

昨今，世界は国家の解体と民族問題が著しくなる一方で，多様な民族の一元化，言い替えれば多様な民族出身者が一つの空間に共生する程度が，かつてないほどの規模で著しくなっている。カナダは，憲法でも，実際の政策においても多様な文化を認める多文化主義を採用してきた。カナダ国民という大枠のみを共有さして，それぞれの出身民族の伝統的な文化を尊重し，それらを各人が誇りをもって維持していけるようにとの政策は，試行錯誤を重ねながらも，一定の成功をおさめながら新たな段階を迎えてきた。このようなカナダの最大の都市圏，トロントには100を越える異なった民族の出身者が共生している。

このトロントにおけるカリブ海地域出身者の祭り，カリバーナはカナダの建国100年目にあたる1967年に始められたが，それからわずか25年しか経っていないにもかかわらず，現在では北アメリカ最大の祭りの一つにまで成長している。垂直モザイクと表現されるカナダの社会経済的な民族構成の底辺に位置してきたカリブ海地域出身者の祭りが，なぜこれほどの規模にまで成長したのか。これを支えてきたカリブ海地域出身者と，彼らと同じ空間に共生してきた他地域・他民族出身の人びととの関係が，カリバーナをつうじてどのように変化してきたのか，多民族・多地域出身者が共生できる都市を創造するためにカリバーナはどのような意味を示唆するのか，などの問題意識が筆者にはある。本稿ではとくにカリバーナという祭り全体の一部であるカリバーナ・パレードに焦点をあて，上述のような問題に関して分析・考察する[1]。この研究を通じて都市における多民族間関係のあり方，都市の祭りの意味などが明らかにされる。

1　祭りのもつ多様な意味

(1)祭りとコムニタス

祭りは洋の東西，歴史，民族そして宗教の如何を問わず行われてきた。祭りという儀礼が，日常的なものではないことは広く知られてきたし，また研究されもしてきた。祭りの最高潮には，それに参加する人たちは陶酔と忘我の状態を一時的に持ちえる。この状態は，人びとの衰えた，あるいは不活性化した精神や日常的な秩序を再生させる力を持つものである，と考えられてきた。日本の民俗用語でいう「ハレ」はまさにこの状態を実現する時空として捉えられ，日常の時空「ケ」が衰えて「ケガレ(ケが枯れた状態)」に至った状態を再生させるための時空なんだ，という指摘はこれまでに多くの研究者によってなされてきた（波平1985；桜井1982；他)。異文化における祭りとして，たとえばカーニバルについての類似の研究が多くなされているし，その他の祭りにかんしても取り挙げられている（たとえば，Turner 1982; Eco, Ivanov, and Rector 1984; Alessandro 1987など)。祭りの特殊な時空においては日常の社会秩序の下にあるものとは異質な状況が創り出されている。日常を社会的に構造化された秩序からなるものとしたばあい，この特異な時空は反構造の状況，すなわちヴィクター・ターナーがコムニタスと称した状況に該当する。コムニタスと称せられる社会状況の下では，人々は日常的な社会関係から解き放たれ，首尾一貫した秩序の下にある日常世界とはまったく異なった経験をする。日常に対して反構造的で，異質な状況においては人々は平等であり，根元的な人間のきずなが生まれる。それは，再び人々が構造化された日常へ戻っていく活力を与え，それなしには社会全体が存立しえないものと解釈される(Turner 1969)。

このようなコムニタスの状況は通過儀礼の境界期，すなわち個人が今まで属していた古い地位から分離・離脱し，新たな地位へ統合するまでの移行の過程に実現される。通過儀礼の境界期は，地位や性の転換，あいまい性，苦痛，暗闇，始源性などの要素を伴うのが一般的である。精神的に活性化するために，私たちは繰り返しに近い単調な日常生活を逃れて，様々な形でなんらかの通過儀礼（これは強化儀礼と称するのが適当だが）を行ってきた。比ゆ的にいえば，ガソリンの少なくなった車は出力が弱くなるので，ガソリン・スタンドという特殊な場所でガソリンを補給し，再び走りはじめる。祭りのような現象は，私たちにとってまさにガソリン・スタンドでのガソリンの補給にほかならず，精神的なガソリンの補給といいかえることができる。

非日常性からなるコムニタスの状況の存在についてははやくから指摘され，ファ

ン・ヘネップが通過儀礼の過程に，そしてホイジンハやカイヨワが遊びの過程にこの状況が含まれることを考察している（van Gennep 1909; Huizinga 1938; Caillois 1958）。ターナーのコムニタスの概念は，ファン・ヘネップの通過儀礼の「移行」の概念を発展的に考察し，象徴的にこの時期の儀礼の本質を捉えようとしたものに他ならない。

(2)祭り・カーニバルと再生

カーニバルの時空はコムニタスの状況を実現できる，という点についてはターナーも指摘している。これはカーニバルのみにではなく，祭り（祝祭）一般にも当てはまるが。したがって，日常的には社会経済的に民族の垂直モザイクの底辺に位置している者であっても，このカーニバルの時空においてはそれを一時的に逆転させることも可能になる。肌の色，出身地，文化などの違いによって差別され，虐げられてきた人たちが自ら現実の自分自身とは異なるもの，たとえば「キング」や「クィーン」などに仮装し，どんちゃん騒ぎをつうじて蓄積されてきた不満，うっぷんを解消することが一時的に可能になる。そしてカーニバルの終了とともに，ふたたび日常の秩序，構造の中に戻っていく。

しかし，この状況はカーニバルの参加者だけでなく，周辺も変化することによってはじめて可能になる。いいかえれば，特定の集団（参加者）だけでなく，彼らと接触する人たち（見物人）も同じ非日常性を受け入れることによってはじめてこの状況が可能になるし，両者ともに精神的に活性化できる。これができないばあい，カーニバルのような時空は体制にとって危険なものになり，不満，うっぷんが攻撃性＝暴力（暴動）という形になって表現されることすらありえる。したがって，社会経済的に垂直モザイク的な構造をもつ社会では，体制は浄化装置としてカーニバルのような時空をつねに保障しなければならないし，他方では集団の攻撃性＝暴力（暴動）を恐れるがゆえにそれをやらせたくない，という二重の拘束に縛られるのである。カリブ海地域社会では，程度の差こそあれ，同様の現象が歴史的にみられた（たとえば，ドミニカの事例は江口 1990，第三章参照；トリニダード・トバゴの事例は Wuest 1990を参照；他）。

体制は社会経済的弱者が実施するカーニバルなどに積極的に協力することによって，垂直モザイクといった構造を維持することができることになる。そして，参加者と見物人とが一体になれるコムニタスの状況が実現できれば，垂直モザイクが水平モザイクへと変化することになる。しかし，体制がそれに否定的なばあい，摩擦が生じ

ることは自明のことであり，暴力（暴動）が生じることになる。後述するイギリスは，ロンドンのノッティング・ヒル・ゲイトのカーニバルでしばしばこのような状況を経験してきた(Sivanandan 1982; Bunyan 1982; et al.)。カーニバルはこのような多様な力を持つものと理解できる。

2　カリブ海地域出身者とカリバーナ

(1)カリブ海地域出身者の歴史

カリブ海地域からカナダへの移民の簡単な歴史については別稿ですでに触れた（江口 1988)。彼らの歴史は，アフリカ奴隷がカリブ海地域を経由してフランス人に連れてこられたことに始まった。しかし，この地域からカナダへの移民が本格化するのは第二次世界大戦後のことである。カリブ海地域出身者のうちでもハイチ，マルチニク，グアドループなどのフランス語圏出身者はフランス系住民が集中し，フランス語が第一の公用語になっているモントリオールやケベックをふくむケベック州に，そして英語圏出身者はおもにトロントを含むオンタリオ州に集中する傾向にある。統計的にみればフランス語を母語とするものは，1986年ではカナダの全体人口の約23.5パーセント，そして英語を母語とするものは約62パーセントを占めている。とくにカナダ東部のケベック州は16世紀の初頭にフランス人の手によって開発されて以来，1763年のパリ平和条約以降イギリス領に併合されてからもフランス系住民がこの州の総人口の約83パーセント（1986年)，ついでニュー・ブランズウィック州で33.5パーセントを占め，その他の州では圧倒的に英語を主に話す人口が占めてきた。

第二次世界大戦後の移民の動態をみると，とくに1960年代から1970年代にかけてカリブ海地域からカナダへの移民は男女ともに急増した。1968年以降カナダでの経済状況の好転と低賃金の手労働力の不足が移民を促す要因となった一方で，もちろん移民を輩出するカリブ諸国の社会経済的な状況が移民を促進させる強力な要因となってきた（江口 1990の第5章参照)。後者はバナナ，コーヒー，ココナッツといった換金作物の栽培以外にはこれといった主だった産業がなく，換金作物の価格も世界市場で低迷する状況が続いてきたからである。統計によれば，1946年から1979年の間に約188,000人の移民がカリブ海地域からカナダにやってきているが，実際にはもっと多くの人たちがこの地域から入国していることが推測できる。なぜなら，最近までカナダの移民の統計の算出の仕方が移民直前の居住地によって分類されるものだったので，イギリスを経由して入国した人たちがしばしばイギリスからの移民として統計上扱われているからである。さらに，カリブ海地域の中国系，インド系移民もアジア系

移民として扱われる傾向にあったので，統計数字はおおまかな傾向を知るため以外には使えない。

1989年にはカナダに総計192,000人の移民がやってきた。そのうちカリブ海地域とラテン・アメリカからのものは13パーセントを占めている。1980-1989年の10年間でカリブ海地域からの移民で多かったのは，ジャマイカから34,852人，ガイアナから32,741人，そしてハイチから22,704人である(Logan 1991: p.12)。また，同じ期間に移民が好んで定着する都市としては，トロントが424,096人，ついでモントリオール181,411人，そしてバンクーバー135,873人という順になっており，圧倒的にトロントが好まれている(ibid: p.12)（表1）。

表1　大都市圏別移民の分布（1980—1989）

15大都市	移民累積数
トロント	424,096人
モントリオール	181,411人
ヴァンクーヴァー	135,873人
カルガリー	58,578人
エドモントン	56,766人
ウィニペグ	41,143人
オッタワ・ハル	39,051人
ハミルトン	24,400人
キッチナー	17,598人
ロンドン	17,366人
ウインザー	12,396人
ヴィクトリア	9,689人
ケベック市	8,787人
ハリファックス	7,552人
レジナ	7,466人

出典：Logan (1991: p.12). Employment and Immigration Canada, Immigration Statistics Division.

移民は入国するさいにどのような資格を要求されてきたのだろうか。まず，女性のばあいの正式の移民としての受け入れに関しては，「後援者を持つ移民」ないしは「推薦移民（現在，この地位は「家族クラス」と称されている）」としての地位でしか認められなかった。かれらのほとんどが住み込み家政婦などの職に就き，それ以外の職に就くことはほとんど不可能に近かった。しかし，家政婦などの職は賃金も少なく，かつ不安定であり，職を失うと社会保険の受給もなく，しかも短期間のうちに新

たな勤め先を見いだすことができなければカナダの移民法に従って帰国せざるをえなかった[2]。他方，男性は1970年代中ごろまで短期の移民として訪れていたが，彼らのばあいには2，3ヶ月間を農業労働者として働き，帰国するばあいが多かった。もちろん，そうでないばあいもあったが，いずれにしても下級賃金労働者として勤める以外は就業機会も限られていた。女性が先にカナダに来ている夫に「後援者を持つ移民」として合流するためには，夫の素行や就業状況などが移民局によって慎重に考慮されたことはいうまでもない。

労働許可制度のもとでは，たとえば住み込みの家政婦を止めて，より賃金の高い他の職に就くことはできず，入管当局によって与えられた時間内に別な家政婦の職を見いださなければ，強制退去の対象になってきた。したがって，家政婦などの職を止め，新たな職を得ることなく帰国しないでそのままカナダ国内に居住し続ければ「不法移民」として扱われるわけである。現在でも，不法移民は相当数にのぼるとみられている。不法と分かって雇われているばあいには，それだけ賃金も値切られ，それにたいして文句もいえない状況である。トロントもけっして差別のない社会ではなく，また働けばそれに見合う現金収入がかならずしも保障される社会でもないのだ。

(2)垂直モザイクの底辺

カナダ人社会学者のジョン・ポーターは，カナダを民族の「垂直モザイク」社会であると表現している。カナダの総人口の約45パーセントがイギリス系，35パーセントがフランス系，そして残り20パーセントがその他の民族を祖先にもつ人たちである。しかも，カナダの経済的上層に該当するエリート760人のうちの92パーセントがイギリス系で，7パーセントがフランス系であり，1パーセントが他の民族出身者であるとポーターは報告している（Porter 1965)。すなわち，垂直モザイクという状況は，社会経済的，そして人口上も多数派であるイギリス系住民をもっとも支配的な民族，ついでフランス系・・・というように多様な民族が垂直的に構造化されている有様を意味している。こういった状況では，ワスプ（「ホワイト・アングロ＝サクソン・プロテスタント」の略）の価値体系を基盤にした文化がカナダ文化ということになり，ワスプ文化を中心に各民族の引きずってきた下位文化（サブ・カルチャー）を身に付けた人たちが分布し，全体としてのカナダ社会を形成しているのである。

垂直モザイク的な状況が，トロントに今日でも存在することはロバート・G.シャープの論文で指摘されている。彼はトロントにおける労働市場とカリブ海地域出身者を含む「可視的」少数者との関係を分析した。その結果，彼らは今日でも社会経

済的な垂直モザイクの底辺に位置し，支配的なイギリス系住民よりも不利な位置にあると結論づけている(Sharpe 1985)。これには様ざまな理由が考えられるが，その一つは，これまで底辺に位置するものが自分たち自身の文化的遺産を誇りをもって社会の他の構成員たちに積極的にアピールする場を持つことが困難だったために，他の構成員たちがこれらの人たちを偏見をもって見続けてきたことが挙げられよう[3]。カナダの掲げる文化的モザイクという理想が，白人にとってはかならずしも白人以外の文化をも含むものではなく，カリブ海地域出身者のような非白人（もちろん白人もいるが，圧倒的に少数者で，大多数はアフリカ系である）に対してはつねに白人による執ような人種差別が存在してきた，と認識する研究者もいる(Brown 1987:65)。

（3）カリブ海地域出身者の居住区

カナダへやってきた移民は，移民当初は同郷，あるいは同族の者が多くいる所にとりあえず落ち着く。トロントではその人口約300万人の約10分の3を占める，英語以外を母語とする多様な民族の多くが，民族ごとにおおざっぱな住み分けをしている(江口一久 1988)。中国系カナダ人のチャイナ・タウン，イタリア系カナダ人のリトル・イタリアンしかりであり，カリブ海地域出身者のばあいも例外ではない。大トロント圏でみれば，ヨークとスカーボロ，そしてトロント市内に彼らの大きなコミュニティが観察できる。トロント市内でいえば，経済的，政治的中心地の北に位置するバサースト通りを中心にカリブ海地域出身者の居住空間は広がっている。この通りの両側にはキリスト教会，カリブ海地域の食料品店（ヤムイモ，タロイモ，バナナ，プランティン，アッキー，をはじめ様々な食品を置いている）からコイル状の毛髪の手入れをするパーマ・理髪店，カリブ海地域料理屋，八百屋，雑貨店，そしてカリブ海地域に関する書物やレコードを扱う店舗などが並んでいる。

この地域一帯の家賃は他の地域に比べて相対的に安く，一般的には低所得者階層の居住区と見なされている。街角では第二次世界大戦中トリニダードで石油ドラムを利用して始められたカリプソやジャマイカの首都キングストンのスラム街で戦後演奏され始めたレゲ，そして後にカリプソとアメリカ南部の黒人の間で中心的なソウル音楽との混交であるソーカなどカリブ海地域社会の音楽がラジカセを通じて流れている。あるいは，ラスタファリアンやレゲ歌手をプリントしたティー・シャツやカッセット・テープを売る露店も並んでいる。これらの人びとどうしではカリブ海地域で広く用いられているフランス語を基礎にし，西アフリカの単語なども多く含むクレオール語やひじょうになまりのある，カリビアン・イングリシュで話されている。これは，

もちろん，どの島出身かによって異なっていることはいうまでもない。衣食住が一つの地域に集合することによって精神的にも，そして経済的，文化的にも住み易いことは確かだ。故郷のニュースはコンタクト，シェアー，あるいはザ・カリビアン・カメラといったタブロイド版の新聞をつうじてあるていど知ることができ，もう少し細かい点にかんしては各コミュニティにある図書館に多くのカリブ海地域住民対象の新聞類が設置されている。このような民族別の住み分けはカリブ海地域出身者に限らず，他の民族集団にあっても観察できる事実である。

しかしながら，衣食住が一つの空間に集合しているとはいっても，民族としての特徴，あるいは出身地域の文化的特徴を持ち続ける努力をしながら，他方で，カナダという国家の，さらにトロントというカナダ最大の都市で生きていくためには必然的に他の民族とのなんらかの共通項を持たざるをえない。この共通項はたとえば憲法，英語，あるいはフランス語という言語，義務教育，そして赤くカエデを染め抜いたカナダ国旗の下でのカナダ人としての国民アイデンティティ，そして多様な民族と共生するということにかんする価値観，など多くの点を列挙できる。しかし，民族，あるいは出身地域のアイデンティティに関してはどうであろうか。居住区はあいまいだが他の民族といちおう境界をもって区切ることができる。しかしながら，当然この地域に居住する人たちは境界内に孤立して暮らしているわけではない。それでは物理的境界を越えたなんらかの契機をつうじて民族的，出身地域のアイデンティティが意識され，醸成されるのだろうか。彼らに対する人種的，社会経済的差別はその一つであり，差別されることによってぎゃくに「カリブ海出身」であることを強烈に意識させられることは確かである。同時に，先にも述べたように自分たちの維持してきた文化的遺産を社会の他の構成員に積極的にアピールし，その良さを理解せしめ，そしてそれの一部分を共有するという段階にまで到達して，はじめて多文化主義を標ぼうするカナダの理想（水平モザイク）に近付くことができることになる。その重要な契機となるのがカリバーナなのである。

3　カリバーナの構造

(1)カリバーナとは

カリバーナ（Caribana)は「カリブ海地域のもの」というふうに訳せる。とくに，トロントではカリブ海地域住民が中心となって実施される年中行事，祭りのことを指している。これが正式に始まったのは1967年のことであるが，事実上は1966年12月にトロント在住のカリブ海地域出身者の間で歌，踊り，音楽の祭典が催されたことに始

まる。1967年は，カナダ建国100周年に当たる。当時，連邦政府はカナダの多文化主義を内外にアピールするために，国を構成する多くの民族（地域）出身者が，それぞれの文化的遺産を他の人たちと共有することを考えた。そのために1966年９月に，連邦政府がトロント在住のカリブ海地域出身者（主にトリニダード・トバゴ出身者）にこのような計画を持ちかけ，それが受け入れられた。これが正式のカリバーナ誕生につながる。そしてこれの運営母体としてＣＣＣＡ(Caribbean Committee for Cultural Advancement)が結成され，1967年７月28日にこの組織が法人化された。法人としての活動目的に７点が挙げられている。活動目的の最も主要な点はカリブ海地域文化の振興ということであり，そのためにもカリブ・コミュニティ・センターを創りだす必要があるということであった。

ＣＣＣＡは，誰でもが十分楽しめるようにカリバーナ実施の日を夏のゆっくりとした週末に設定した。こうすることによって，人びとは暖かい日和の下でゆっくりと祭りを堪能することができると考えたからだ。これ以降，カリバーナは８月の週末に固定化されていくことになる。

(２)カリバーナ：カリブ文化委員会

カリバーナ実行委員会の正式名称は「カリブ文化委員会」(Caribbean Cultural Committee)である。「カリバーナ」はこの委員会の登録商標である。1991年度の委員会は議長１人，財務１人，書記１人，そして一般理事11人からなっている。これらの委員の出身国をみてみると，議長をはじめ10人までがトリニダード・トバゴ出身者で，ジャマイカ出身者が３人，そしてアフリカ出身者が１人となっている。理事は名誉職であるが，彼らとは別に常務理事が１人と秘書１人が有給で雇われている。常務理事はやはりトリニダード出身者で，秘書はジャマイカ出身者である。

理事会は２週間に一度定期的に開催されるが，常務理事と秘書は多くのヴォランティアともども毎日出勤して，雑多な業務をこなしている。理事にトリニダード・トバゴ出身者が圧倒的に多いのは，人口的に多いことと，トリニダードにカーニバルの長い伝統があることを反映している。ジャマイカのばあい，カトリックの陰は薄く，カーニバルに馴染みはないが，しばしば「ジャマイカン」といえばカリブ海地域出身者の別称として通用するほどトロントで人口的に多いことを反映しているようだ。現在の理事長はもともとトリニダード出身であるが，1970年からオンタリオ州政府法務省に勤めてきた。これまで州検事，州検事主事などの地位を経験してき，1991年４月から法務省の最初の人種関係コーディネーターに就任した。この地位で彼は法務省の

ために反人種主義対策を作成し，それを履行することが義務になっている。名誉職として，彼は過去にトロントと地区・サッカー連盟の会長や副会長，そしてオンタリオ・サッカー協会の理事にも就任している。州政府とカリブ海地域出身者との間のコーディネーターとして，彼は適任者なのである。他の理事は弁護士，会計士，エンジニアなどさまざまな職種に付いているが，トロントのカリブ海地域出身者の間ではエリートといえる。

理事はカリブ委員会の会員の中から3年任期で互選され，1/3の理事が毎年クジで退任するが，資格があるかぎり総会時の選挙で再選されえる。会員数は現在そう多くはない。しかし，カリバーナの成長は会員数に確実に影響を与えている。委員会は2年前から年間1回コミュニティの広報をつうじて会員を募ってきた。このかいあってか1990年にはたった97人だった会員が，91年には350人にまで増加した。委員会の内規（*By–Laws No.1General By–Laws*）の会員権の資格の条項によれば，理事会で認められ，年会費を支払い，会員としての義務を履行する限りにおいて希望者は会員にはなれる。しかし，常務理事の話しでは，黒人・カリブ海地域出身者であることが資格の非成文化された必要条件である，ということである。現在，改正法を検討中で，準会員権を付け加え，カリブ海地域出身者以外でもカリバーナに参加できるようにしたいということである（常務理事の談：1991年8月7日）。

(3)カリバーナ・パレード参加者

(a)パレード・バンドの資格

1991年のカリバーナのスケジュールは表2の通りである（表2）。

表2　1991年カリバーナ・スケジュール

7月22日	市役所で公式に祭の開始が宣言される（無料）
7月26日	市役所でのカリバーナ・ウォーム・アップ・パーティー開催（無料）
7月24，29，30，31日，8月1日，2日	カリバーナ月夜のクルーズ（有料）
7月28日	ランポート・スタジアムでジュニア・カリバーナ競技（有料）
8月1日	ランポート・スタジアムでのバンドのキングとクィーンの衣装競技(有料)
8月2日	大カーニバル・ダンス（有料）
8月3日	カリバーナ・パレード（街路では無料；スタジアムでは有料）
8月3日	カリバーナ・ダンス（有料）
8月4，5日	オリンピック島での音楽祭（有料）

註：*CARIBANA 1991 July 22 to August 5, 1991* より作成。

7月22日に始まり，8月5日にまでの15日間のスケジュールである。このうちでも，とくに無料の部分のパレードが多民族出身者が一時的にコムニタスの状況を実現でき

る，祭りのもっとも重要な部分なのである。祭りの中心部分である。このパレードには多くのバンドが毎年参加し，それぞれのバンドの衣装やその意匠で競い，キング（男性）とクイーン（女性）を選ぶというわけであるが，それぞれのバンドがなんらかの音楽を奏で，ダンス（「ジャンプ・アップ」）をしながら行進するというのが特徴になっている。パレードに参加するバンドはすくなくとも次のような資格を満たさなければならない：

1．カリブ文化委員会の登録用紙に必要事項を書き込み，署名，提出し，そして100ドルの保証金と（1991年のばあい）1991年6月15日土曜日午後2時までに委員会あてに現金，ないしは署名した小切手，あるいは郵便為替で25ドルの登録費用を払うこと。初めてカリバーナ・コンテストに参加するバンドは，衣装のデザインのコピーを提出しなければならない。
2．カリブ海地域の精神に寄与し，その文化遺産を反映し，仮装行列の伝統を維持するようなテーマ，ないしは課題を表現しなければならない。
3．次の少なくとも一つを伴わなければならない：生音楽，ディスク・ジョッキー，あるいは文化的に動かされる音楽アンサンブル。パレードのルートに沿って音楽を奏でるすべてのアンサンブルは，委員会に公式に登録しなければならない。
4．最小限60人の仮装行列参加者を持たなければならない。
5．ゲスト・バンドは委員会に登録しなければならないが，コンテスト参加の資格はない。
6．カリバーナ1991年以前に北アメリカの外で催されたコンテストで使われた衣装は，カリバーナ・コンテストに参加が認められる前に許可を得なければならない（Caribbean Cultural Committee 1991 *Rules and Regulations 1991 Parade of Bands*）。

この他に，行列を整理するために各バンドは仮装行列参加者20人に1人の割合で整理員を用意しなければならないことや，カーニバル・キングやクィーン・コンテストに関する規則をはじめ，多くの点が規則集に記されている。

（b）バンドのテーマ

1991年のパレードに参加したバンドの各テーマや特徴の一覧表が表3である。

表3　1991年カリバーナ・パレード参加バンドとその特徴

（1）『カリブ・ファンタジー』
（2）『現実的な』ボディ・ペイントやペイントされた衣装が用いられる。

(3)『様々なトライブのダンス』多くの羽毛や輝く物を使う。このバンドは中国人，アフリカ人，インド人の文化集団のエスニシティの特徴を描く。

(4)『世界のジプシー』ジプシーの神秘性をもたらす。インド，フランス，イラン，モロッコなど世界中からのジプシーが参加する。参加者はシフォンとサテンの衣装を付け，トリニダード・トバゴの一流のブラス・バンドの一つ，アトランティクの音楽で踊る。

(5)『光の王国』自然光と考えられるシンボルを描く。「たそがれ」や「日光」を含んで表現される。「信号灯」と呼ばれるものも表現されている。

(6)『パラダイス』「パラダイス」と呼ばれる神秘的な所で見いだされると思われるあらゆる良いものを表現している。衣装は，花，鳥，蝶，そして他の色彩豊かなものを表現している。

(7)『色彩物語り』9部の色彩豊かな衣装から構成されている。「湾岸の火」「ダラー・ワイン」「マルコ・ポーロの冒険」「祝宴中」「何かを掴み，振れ」などのテーマから成っている。

(8)『アウタ・ディス・ワールド：トリニダード・トバゴ』

(9)『日本祭り』仮装者は「春祭り」「収穫祭」「空手」「忍者」のような日本文化に関する様々な祭りやテーマを描く。

(10)『明日のアフリカ』アフリカの全部族が一つになるという夢を描いている。参加者は赤，黒，銀，金色の衣装を付ける。

(11)『アフリカの統合』このバンドは，アフリカの異なった部族が溶け合って「統合」することを描いている。

(12)『アラビア・ナイト』この「ペルシャ湾」に由来する創作は，砂漠での生活を描いている。バンドの部分は妻，神殿の処女，ハーレムのダンサー，扇を持つもの，ハーレムの警護人，そしてオアシスから成っている。衣装は軽いシフォン，絹，サテン，ヴェルヴェット，そして錦から作られている。

(13)『珊瑚礁にて』海の不思議さを描く。仮装者は水，波，蛸，魚，そして珊瑚を描いた衣装を付ける。

(14)『物事の本質』このバンドは，自然の中に見いだされるあらゆるテーマを描く。とくに，沢山の輝きと色彩を使用する。

(15)『一つに統合したカリブ海地域』様々なカリブ海の島じまの国旗を描く。

(16)『カリバーナの魔法の瞬間』カリバーナに溢れる興奮と色彩を描いている。

(17)『ホット！ホット！ホット！』熱を作り出すものを描く。一つの部分は「太陽崇拝者」，他は，「火，火」と呼ばれる。金や赤のような明るい色がふんだんに使われている。

(18)『オーシャン・ファンタジー』

(19)『蝶の飛行』このバンドは，労働組合による初めてのものである。あらゆる形や大きさの蝶が青と金色の労働組合の公式の色の衣装を付けて，レークショアー・ブルーバードに沿って蝶のようにパタパタ歩く，という美しい光景を作り出す。

(20)『カルチュラル・ムード：パレードでの他日』このバンドは何年間もカリバーナでレゲを演奏してきた。バンドのある部分では，ラスタファリアンが特徴付られ，明るい色の衣装を付け，他の部分では「ポコマニアン」のスピリットを思い起こさせる。

(21)『カルメン・バイア・マルハー』カルメン・ミランダの「ハリウッド的な側面」や，北東ブラジルに位置するバイア州の神秘主義とリズムを描く。さらに，女性の強さと美しさも描き出す。
(22)『悪魔のパラダイス』このバンドの参加者は，悪魔が赤い色の衣装を付けて街路に出たとき，地獄の激しさを経験するだろう。
(23)『困難な時期』
(24)『短足とジャブ・ジャブ』。デヴィル・バンドを中心に，伝統的なグレナダの祝祭と音楽を特徴とする。
(25)『全員甲板に』このバンドは伝統的な「船員仮装」にちなんでいる。メンバーは船員の服装をする。
(26)『ポルカデリック・アドヴェンチャー』このバンドは，様々な形と色彩の水玉模様を特徴とする。
(27)『文化的創造の解け合うクロスロード』
(28)『異なった世界』
(29)『ドラミング』
(30)『フィエスタ・デ・タンボール』
(31)『法と秩序』
(32)『色の付いたワイツクブリ』(ドミニカ・カーニバル委員会による)。
(33)『太陽の中の貴方の場所』

<ゲスト・バンド>

(34)『カリビアン・コネクション』参加者はバンドの印を染めぬいた色彩豊かなティー・シャツを着る。
(35)『カリビアン・ファンタジー』エアー・カナダが飛ぶカリブ海地域や様々な飛行先を描く。
(36)『我々の多様さを祝して』(オンタリオ市民権省による)。バンドは市民権省で働く人たちからなり，オンタリオ州の文化的多様さを祝す。
(37)『飲まずに乗れ』(オンタリオ法務省とドミニカ国オンタリオ協会による)。このバンドの主な特徴はソロモン，すなわち骸骨である。他のメンバーは「生きて着け」というスローガンを染めたティー・シャツを着る。骸骨は次のような言葉を示している：「私は飲んで運転した，しかし生きてられなかった」
(38)『砂漠の嵐』このバンドの参加者はいろいろな味で満たされたアイスクリーム・コーンやパイをかたどった衣装を着けている。
(39)『より良き明日のために共に働こう』大トロント圏の警察が初めてこのパレードにこのタイトルで参加した。(カリブ地域出身者の) コミュニティと警察とのよりよい関係を築く試みである。
(40)『ドラッグ撲滅』これはカナダのミドル級チャンピオン，ドノバン・ブシャーを取り上げている。彼は麻薬薬災についてのパンフレットを手渡す。
(41)『セサミ・ストリート』テレビのセサミ・ストリートを特徴としている。
(42)『ヴァット・19・フォンクレァー』

註：バンドの特徴については，*share* 紙，vol.14(16)，August 1，1991より作成。観察によれば，微妙な色彩は周囲の環境と融け合って，何とも表現できない素晴らしさである。*share* 紙 (August 8号) などの公式報道によれば，参加バンド数は50になっているが，ここでは確認できた数のみを挙げておいた。

バンド・リーダーの約90パーセントはカーニバルがもっとも盛んなトリニダード・トバゴ出身者で，ジャマイカ２，ブラジル１，ウルグァイ１，そしてバハマ１の構成になっている。彼らのテーマをみると，かならずしも規則集の「資格」で要求されているような内容のもので統一されているとはいえないようなものもある。どちらかといえばカリプソの内容のような，時事的な状況を反映したテーマが多い。カリブ海地域の文化を反映したものといえば，アフリカを主題にしたものがそれに該当するだろう。

各テーマは個人，あるいは集団で考案され，キングとクィーンをはじめとする衣装もテーマに沿って考えられる。ほとんどの参加者は，自分たちが着用するはずの衣装を，パレード直前まで見ることができない。バンドの一部の人たちによって作られ，パレード直前まで秘密にされるからだ。カリバーナの数カ月前にバンド・リーダーがデザインを考え，彼とヴォランティアが材料を購入して衣装を制作する。もちろん衣装のための費用は，バンド参加者全員が払う。あるリーダーのばあい，彼と家族，親族が一丸となって衣装制作に当たり，自分たちのみの負担する費用はひじょうに多い。そして，パレードではバンドのテーマとクィーンとキングの衣装が競われることになる。一つのバンドの参加者が数百名ということもけっして珍しくはない。

そして，音楽だ。パレードの数日前には，カリプソのスチール・ドラムやそれを何連も備える台車の制作風景が，トロント大学の周辺で観察される。パレード出発の地点が大学に隣接していることと，キャンパスにはゆったりした土地があるからにほかならない。パレード当日はトラックや台車に楽士，楽器やアンプ類を積み込み，音楽を先頭にバンドが行進する。参加者は自ら様々なテーマに沿ってデザインされた衣装を着けて，しかもたいていはこってりと化粧をしているので，まったく大変身してしまう。さらに音楽や歌，さらにはアルコールが加わるので，忘我の状況が，コムニタスの創出が容易に可能になる。

(4)警察や労働組合，州政府の参加

1991年のパレードの参加バンドには，オンタリオ州政府の法務省や市民権省，大トロント圏の警察，そしてオンタリオ州の労働組合が初めて参加している。カリブ海地域出身者のコミュニティと警察との良好な関係を築くこと，州の文化的多様性，すなわち文化的な豊かさをアピールすること，良い労働関係を築き，維持することなどがその趣旨になっている。1985年のカーニバル時には，警備に当たっていた警察官一人が見物人にビールびんで殴られ，数人の警官がびんを投げつけられるという事件が

あった。そして1986年には，駐車場で騒いでいた連中に，警察官がやはりビールびんを投げつけられるという事件が生じた。それ以降は大した事件もなかったが，皆が一緒になって良好な関係を築かなければならない，という姿勢が警察の参加に見える。

最近のパレードでは警備に当たる警官もバンドの音楽に体を動かし，参加者とともに踊る光景すらしばしば見られ，わきあいあいとした関係が観察される。

（5）観客・聴衆

見物人はもちろんのこと，参加者，参加バンド数は1967年の初年度と比較すると著しく増加してきた（表4）。今日のカリバーナは，北米で最大の祭りの一つにまで成長している。北米最大の祭りはニューオリンズの「マルディ・グラ」（フランス語名称で，「謝肉祭最後の日」を指し，カーニバルのこと）である。今日，300万人以上の観客・聴衆・参加者を数える(Cohen and Coffin 1987: 77-84)。そして，ついで大きい行事はニューヨークでの Macy の感謝祭の行進である。これは200万人近い観客・聴衆・そして参加者を動員する(ibid.: 348-351)。カリバーナは，わずか25年のあいだにこれらにつぐ規模にまで成長したのである。

聴衆や参加者は，カリバーナの行進中は飲酒が公に認められている。カリバーナの意匠を染めたティー・シャツを着，あるいはカリバーナのワッペンを付け，飲みながらカリプソなどの音楽にあわせて踊り，行進する。したがって，パレードの直接の参加者だけでなく，見物人でさえ一時的に忘我の状況を創り出し，それに浸ることができる。いいかえれば，参加者・見物人ともにコムニタスの状況を実現することができることになる。そして，何時間ものパレードが終われば，三々五々市内に消えていく。

表4　カリバーナ・パレード見物人・参加者・バンド数の推移(1967-91)

年	見物人	参加者	バンド
1967	75,000	1,000	5
1968	80,644	1,400	8
1969	95,000	1,500	10
1970	25,000	?	9
1971	100,000	1,500	10
1972	100,000	2,000	12
1973	100,000	2,000	12
1974	50,000	3,000	?
1975	?	?	?
1976	100,000	3,000	15
1977	?	3,000	?
1978	?	?	?
1979	50,000	1,500	?
1980	?	?	?
1981	100,000	3,000	20
1982	?	?	?
1983	?	?	?
1984	200,000	4,500	23
1985	300,000	5,000	20
1986	275,000	6,000	26
1987	500,000	6,250	30
1988	550,000	6,500	36
1989	750,000	7,000	40
1990	1,000,000	7,500	42
1991	1,200,000	30,000	50[1]

註：過去の見物人，参加者，バンドに関する公式の数字をカリバーナ実行委員会は有していない。したがって，数字は様ざまな新聞からの抜粋であり，その中には警察の発表によるもの，あるいは部分的にカリバーナ実行委員会によるものなどが含まれる。参照した新聞は以下のものである：Contract; Globe and Mail; Share; Toront Star; West Indian News and Observer.　「参加者」とは，各バンドに付いて行進する仮装行列者を指している。「見物人」は，仮装行列者やバンド・メンバー以外の人たちを指すが，ただたんに見たり聞いたりしているだけでなく，音楽にのって体を動かし，行列とともに行進している。[1]新聞などの公表数は50だが，42しか観察できていない。表1では，42バンドを記しておいた。

4　カリバーナの特殊性

(1)他の地域への影響

カリバーナの魅力は，カリブ海地域出身者が分布する北アメリカの他の地域にも影響を与え，近年同種の祭りがあちこちで催され，成功してきた。カリブ海地域出身者はおもにトロントを含むオンタリオ州を筆頭に，モントリオールを含むケベック州にも集中しているが，少数ながらも他の地域にも分布している（表5）。

表5　1986年カリブ海地域出身者の州別人口分布（20%標本資料）

Nfld	PEI	NS	NB	Que	Ont	Man	Sask	Alta	BC	YT	NWT	Canada
25	-	130	70	12,980	30,060	1,260	290	2,455	1,205	-	5	48,475

註：キューバ，ハイチ，ジャマイカ，プエルト・リコ，そして他のカリブ海地域出身者の単一の出身地に関する回答に基づいている。ガイアナなどの南アメリカ大陸部は除く。Statistics Canadaによる。

カナダ国内ではウィンザー（1988年開始），ウィニペグ（1988年開始），エドモントン（不詳），モントリオール（1988年開始）でも開催され，大トロント圏内のハミルトンでも「カリ・カン」という名の祭りが催されてきた。アメリカ合衆国内では，ニューヨーク（1966年開始）をはじめデトロイト（1986年開始）やバッファロー（1988年開始）で催され，おおよそ成功している。世界的にみればニューヨーク・ブルックリンの「Labor Day Carnival」，ロンドンの「Notting Hill Gate Carnival」がカリバーナと並んで有名である。しかし，非カリブ海地域出身者をも巻き込んで著しく成長してきたのは，やはりカリバーナがだんとつである(Nunley 1988)。上記のカナダ各地での類似の祭りの開催は，カリバーナに刺激されたものであり，そういう意味でもカリバーナは単なるトロントのカリブ海地域出身者の祭りというだけではなく，北アメリカの多民族の祭りでもある。

(2)カリバーナの成功の理由

カリバーナがカナダ社会，とくにトロントで成功してきた理由としていくつかの点が考えられる。一つは，カリブ海地域出身者が歴史的にもともと多民族出身者からなっており，トロントのような多民族出身者からなる移民社会とそういう意味で類似している。したがって，それだけトロントで受け入れられやすいということがある。二つ目の点は，これがオープン・スペースで，しかも行進という形で行われる部分があり，誰でも気軽に参加できるという点にある。とくに，初年度から一貫して使われ

てきた大学通りは，ビジネスや政治の中心地であり，通りは広くて行進に向き，交通整理にも適している。1991年度から，有料のクローズド・スペースで実施されるパレードの部分もできたが，これもまだほんの一部でしかない。道路はある位置から別な位置への移動に使われるが，日常から新たな日常への移行期（非日常）に該当するカリバーナにはなくてはならない存在である。しかも，主だったビジネスや政治から疎外されてきたカリブ海地域の人びとにとって，大学通りがカリバーナの舞台になることは，日常の地位の逆転を実現できる最高の舞台ともなってきた。三つ目は，音楽，踊りが祭りを最高潮に導く装置の中心になるが，音楽や踊りは容易に民族の境界を越えて受け入れられるという性格をもっている。しかも，カリブ海地域の音楽というものはアフリカ的な要素，ヨーロッパ的な要素だけでなく，その他の地域社会の多くの要素の混交からなっているので，それだけに多様な民族出身者の心の琴線を揺さぶることができるわけである。カリプソやソーカのような音楽は，一時的にであれ，支配的な民族の時間的，空間的秩序を止めてしまう力をもっている[4]。したがって，祭りの参加者や見物人の間に存在する皮膚の色の違い，文化・社会経済的差異をも一時的に忘れさせてしまい，誰もが同じ地平に立つことが可能になる。すなわち，コムニタスの状態が創出されるのである。四つ目は，連邦政府，州政府，市政府などの行政の協力が得られたという点も大きいだろう。これは，カナダ憲法が多文化主義を標ぼうしてきたので，その宣伝のためにも行政は積極的に協力するという側面があったことは否めないが。

五つ目は，カリバーナの会員資格が黒人・カリブ海地域出身者に限られているという点である。これらの人たちに資格を限定することによってカリブ海的特徴が維持されてきた。社会経済的に垂直モザイクの底辺以外の民族出身者にまで資格を開放すれば，カリバーナの運営上の主導権がカリブ海地域出身者の手から離れ，結果的にカリブ海的特徴も失われてしまいかねない。

トロントには年中様ざまな祭り・行事が催されているが，ポルトガル系，イタリア系，中国系など他の民族出身者の祭りがカリバーナのように多くの人を引き付けることはかつてなかった。他の民族的な祭りは，それぞれがひじょうに閉鎖的・排他的な祭りである。たいてい同民族出身者が密集している地域で行われる。したがって，それだけに急成長するというようなこともないし，見物人をも巻き込んでコムニタスの状況を作り出すということもない。

ただ，冬のサンタクロース・パレードは1日だけの催し物だが，75万人ほどの見物客を引き付け，それだけに協賛企業も10以上にのぼってきた。しかし，見物人は子供

が中心であり，さらに寒い冬の時期であるためにひじょうに開放的になり，精神的に活性化できるというようなものではないようだ。

（3）カリバーナの経済的波及効果

カリバーナはこれへの参加者・見物人を精神的に活性化する効果を持つだけでなく，トロントの経済界におおきく貢献してきた。ホテル，レストランといった観光関連施設だけでなく，他の多くの分野に波及効果をもたらしてきた，という結果がカリブ文化委員会の委託した調査結果に報告されている(Decima Research 1991)。これによれば，1990年のカリバーナは145億カナダ・ドルもの額をトロントに落としたのではないかとされている。この結果にあきらかに刺激され，1991年のカリバーナにはこれまでになく，多くの企業が協賛するという効果を生み出している。たとえば，Ontario Lottery Corporation，Molson Breweries，Silcorp Limited （Mac's というコンビニエンス・ストアーの親会社)，Coca-Cola，Teleglobe Canada （電話会社）などが代表的なものである。

5　垂直モザイク社会から水平モザイク社会へ

カナダはカリブ海地域出身者だけでなく，インディアン，イヌイット，そしてメティス(イギリス系白人とインディアンとの混血)の三者からなる先住民(ファースト・ネーションを構成）をはじめとして，ひじょうに多くの異なった民族出身者からなる社会である。連邦政府は憲法上この特徴を生かすためにも多文化主義を唱ってきた。しかし，連邦レヴェルで実質的な影響力をもってきたのはイギリス系住民で，それについでフランス系住民が位置している。他の様々な民族は，すでに述べたように多くの要因に基づいておおざっぱに社会経済的に垂直的な序列を形成してきた。

1867年に建国されたカナダは，形式的には旧英領北アメリカ法によって1982年まで縛られ，独自の憲法を持ち得なかった。このような状況の下で，トルドー政権下の1982年４月17日に新憲法が成立し，イギリスから実質的に独立することになった。しかし，これを連邦の新憲法とするためにはカナダを構成している10州の議会での批准が必要とされた。新憲法は，英仏両言語の実質的な公用語化を規定しているが，フランス系住民が過半数を占めるケベック州の特殊性をとくに認めているわけではなく，その特別な権利を認めているわけでもない。「白い黒人」というような蔑称を与えられ，垂直モザイクの序列でつねにイギリス系の次ぎに位置してきたフランス系住民が支配的なケベック州議会は，この新憲法を不当なものとして，批准しなかった。ここ

にカナダの複雑な民族問題の一端をかいま見ることができる[5]。

ケベック州の新憲法の批准を急ぐ連邦政府は，1987年4月30日，首都オッタワの郊外ミーチ・レークでケベック州の主張を相当いれ，かつ諸州に立法における拒否権を与えるというような政治的譲歩をしてしまった。ケベック州はすでに1986年に5項目にわたる要求を連邦政府に提出し，それが受け入れられれば新憲法を批准するといっていたのである。(1)ケベックがカナダで「特殊な社会」であることを憲法に明記すること；(2)カナダ最高裁判所判事をケベック州から少なくとも3名任命すること；(3)移民の受け入れについての各州の権限の強化；(4)各州の管轄分野における連邦支出権を制限し，費用負担計画に不参加の州には，財政的補償を行うこと；(5)州権にかかわる憲法改正へのケベックの拒否権，がそれである。ミーチ・レークでは，ケベック州がかねてから要求していたこれらの5点に加えて，(6)欠員になっている上院議員の任命に対する当該州政府の影響力の行使；(7)憲法，経済，その他についての連邦ー州首相会議の少なくとも年1回の開催，の二点を加えて，「原則に関する声明草案」が起草された(Dunsmuir 1989: pp.13-19)。しかし，この合意による新憲法の修正案は，各州の議会で批准期限の1990年6月23日までに可決される必要があった。最終的には，この修正案(ミーチ・レークの合意)は批准されなかった。そのもっとも大きな障害となったのは（もっともこれはケベック州にとっての障害だったが)，マニトバ州議会での1人のインディアン議員(エライジャ・ハーパー)の論理明せきな議論の展開と，かれを支持し，先住民の権利の回復を訴え，州議会の建物を取り囲んだ先住民であった。先住民の権利の回復を抜きにしたケベック州のフランス系住民のみの特殊な権利の認知は，許されないというものであった（Johnson: 1990)。

先住民は，先住民議会として土地権の回復，自治などの諸要求を連邦政府に訴えてきた。異なった論理体系をもつものがそれぞれの要求を満すためには，互いに妥協するしかない。1991年夏期ブリティッシュ・コロンビア州ウィスラーとケローナで，先住民代表者と連邦を構成する10州の首相，そして連邦政府首相が対等な形で，カナダ史上初めて憲法論議が開始された（*Globe & Mail* 紙，August 27，1991)。「ケベックが特殊な社会であることを主張するなら，わたしたちこそまさに特殊な社会を形成してきたのだ」このようにして，ケッベクや先住民の新たな位置づけをめぐって議論が始まったが，多文化主義をひょうぼうしているにもかかわらず，カリブ海地域出身者をはじめとする他の少数民族についての憲法論議への参加はまったく触れられないままである。

しかしながら，それでもカナダは民族政策にかんしては気配りをみせる政策を採っ

てきたようだ。増えつつある多民族からなる移民の受け入れには気を使い，移民の定着過程についてもさまざまな施策を実施してきた。カリバーナへの支援はその一環である。しかし，真の多文化主義を実現するためには，垂直モザイクから水平モザイクへと移行する必要があり，同じ地平線上での対等な民族の共存政策が求められることはいうまでもない。そのためにも個々の民族，出身地，文化などを越えた互いの妥協も必要である。カナダ国民としての憲法，言語などの共有などはその一つであり，同時にそのためには異なった文化をも尊重し，かつ自らの文化にプライドをもつことが重要になってくる。

小　　括

本稿では，多民族からなる大都市，トロントでカリブ海地域出身者の祭り，カリバーナがどのような意味を持つのかを中心に考察がなされてきた。カリバーナの持つ意味は，多義的である。一つは，カリブ海地域出身者自身にとっての意味であり，自分たちの「伝統」文化を子孫に伝達したいという目的の祭りであると同時に，民族的なプライドを他の地域，あるいは民族出身者に誇示するための祭りである，という点だ。長い間，他者から一方的にマイナスのメッセージ（社会的差別）を送りつづけられ，マイナスの自己像を持たざるをえなかったカリブ海地域出身者，とくにアフリカ系の人たちが，祭りを契機にこのマイナスの自己像をプラスに評価しだしたのである。さらに社会経済的な民族の垂直モザイク構造の底辺に位置づけられ，どうしようもない状況で蓄積される不平，不満のはけ口としてもこの祭りが機能する，という浄化装置としての意義も重要である。

さらに，それらのみではなく，この祭りが年々盛大になってきた背景には，カリブ海地域出身者と同じような状況に置かれてきた他の移民，あるいは階層の人たちが参加することによって，この人たちも祭りをつうじて精神的に再生を果してきたという点があることも見逃すことができない。彼らに加えて，垂直モザイクの頂点に立ってきたイギリス系住民やその他の住民でさえも，すでに述べたようにカリブ海地域のボーダーのない音楽・踊りとオープン・スペース，そして踊りや音楽の醸し出す通過儀礼の移行期に該当するコムニタス的状況に誘引されるがゆえに参加してきた。
そして，この祭りは人びとの精神的な活性化や統合の契機として機能してきたばかりでなく，経済的にもトロントに大きく貢献し，都市の経済的な活性化にも機能してきたことにも注目する必要がある。

新たな，様々な都市問題が生じてきた一方で，トロントのカリバーナは様々な民族

出身者とその子孫を巻き込んだ大きな祭りに成長し，かれらを一時的にも同じ地平に立たせることができるまでになった。これは，祭りが垂直モザイクの壁を突き崩し，カナダの理想とする水平モザイク社会を創造する大きな契機となりうることを示唆している。しかし，これからカリバーナがより大きい，かつ民族を越えた祭典としてますます成長していくためには，特定の民族や特定の文化に偏ったテーマから，一歩拡大してテーマを設定する必要に迫られるにちがいない。

日本においても，大阪市生野区の在日朝鮮人・韓国人による生野民族文化祭が1983年から，そして1990年の11月から「ワッソ」と称する在日朝鮮人・韓国人を中心とした祭りが在日朝鮮人・韓国人の手によって政治的境界を越えて定期的に催されてきている。とくに，前者の影響によって同種の祭りが福岡，神戸市の長田，東京の荒川，川崎市，名古屋においても実施され，京都でも1993年９月に計画されている。これらの祭りはカリバーナと類似の意味をもつと考えられるが，この点に関しては別稿で明らかにする予定である。

世界的に民主主義・平等主義の思想がますます高揚し，国民国家（１民族１国家）の普遍化の反動としてこれまで抑圧されてきた多くの民族の固有の権利の回復に関する主張が台頭してきたことは明らかである。多様な文化性を社会の成人が互いに認め合い，かつそれらを部分的に共有し，しかもそうすることで同じ社会の成員であるという自覚を生み出す，という大きな力となることをカリバーナという祭りが教えてくれる。

このようなカリバーナの事例は，21世紀の「ボーダレス」時代と民族問題を考えるうえでひじょうに重要な示唆を与えてくれるだけでなく，民族問題に関しての比較文化的視座をも与えてくれる。

註

1）調査は，1987年と1991年夏にトロントで実施された。とくに，後者の調査はカナダ政府の1991－92Faculty Research Award Programme Grant によるものである。調査では，トロントのカリバーナ主宰者（カリブ文化委員会）の常務理事ジョアン・ピエール女史や他のメンバーはじめ，多くの方の世話になった。ここにカナダ政府と調査でお世話になったすべての皆さんに感謝の意を表する。本稿は，上記グラントの成果としてカナダ政府に提出した報告書に手を加えたものである。また，1991年10月10日，東京大学における第45回日本人類学会・民族学会連合大会で「トロントにおけるカリブ海地域出身移民の定着過程とかれらの祭り「カリバーナ」の機能について」の題で研究報告をしている（大会報告要旨34頁）。本稿第１節の「(１)祭りとコムニタス」の

部分が，拙稿「「社会主義か死か」 ―キューバ社会主義と観光―」（立命館史学12号，1991年）の第1節の「2　観光と「コムニタス」の実現」と一部重複するが，これは観光と祭りが類似の性質を持っていることを説明するために必要であったからである。

2）アビゲイル・B.バアカンはこのような人たちの生活史を収集して紹介している（Bakan 1987）。

3）そして，カナダ人の多くが観光客としてカリブ海地域へ毎年出かけるが，彼らをもてなす現地人のもてなし方にも多少理由があるのかもしれない。これらの現地人（大多数はアフリカ系住民）による観光客のもてなしには，かならずといってよいほどアフリカ的要素がステレオタイプ化して表現され，しかもホストが自分たちを卑下するという点が強調されている。キューバを除く地域においては，観光客という外縁の不明確な「異人」対現地人（とくにアフリカ系住民）の関係は，対等な個人対個人の関係というよりも，むしろ歴史的に奴隷解放前のヨーロッパ系植民者対奴隷という関係が形を変えたものでしかないようだ。奴隷制下では，植民者と奴隷の関係は，主人と自由を剝奪され，強制的にサーヴィスを要求されるというものであった。奴隷解放後の観光客とアフリカ系住民の関係は，「強制」に代わって「自由意志に基づいた」「現金」を介した関係に変身したにすぎない。「奴隷的」なステレオタイプを観光客（ゲスト）が期待し，一部の現地人（ホスト）が残りの大半の現地人と接触できない準閉鎖空間（「クラブ・メディ（地中海クラブ）」のようなオール・インクルーシヴ方式の空間やホテルなど）内でこのステレオタイプを演じることによって，ホスト・ゲスト両者は不必要なエネルギー・コストの支出を避け，この地域の観光が成立してきた。これらの点にかんしては，1991年6月8日南山大学における日本ラテンアメリカ学会第12回定期大会で「カリブ海地域の観光に関する諸問題」という題で筆者が報告しており，報告要旨が日本ラテンアメリカ学会会報 no.38に掲載されている。

4）たとえば，キューバの舞踏音楽ルンバをめぐってダニエルは，同じような力の存在があることに言及している（ダニエル 1991）。すなわち，ルンバは一時的にコムニタスの状況を創り出すということである。

5）カナダの少数民族と国家の関係の一事例として，拙稿「日系カナダ人の「北米文化」適応過程と「国際化」」筧文生・飛田就一編 1990『国際化と異文化理解』法律文化社やモホーク族と連邦政府の関係を考察した拙稿「われわれに，国を返してくれ」飯島茂編『せめぎあう民族と国家 ― 人類学の視点から ―』アカデミア出版（1993年春出版予定）がある。本稿の「5垂直モザイク社会から水平モザイク社会へ」の部分は後者「われわれに，国を返してくれ」の一部と内容的に重複することを断っておく。

＜参考・引用文献＞

Alessandro, Falassi 1987 Time out of Time. New Mexico: University of New Mexico Press.

Baken, A.B. 1987 "The International Market for Female Labour and Individual Deskilling:

West Indian Women Workers in Toronto," *Canadian Journal of Latin American and Canadian Studies*, vol.XII (24) : 69-85.

Brown, L.W. 1984 "Transition Abroad: West Indians and the Canadian Mosaic," *Afro World*, vol.4(2,3) : 59-68.

Bunyan, Tony 1982 "The Police against the People,"*Race & Class*, vol.XXIII (2,3) : 153-170。

Caillois, Roger 1958 Les Jeux et les Hommes. Paris: Gallimard (清水幾太郎・霧生和夫訳『遊びと人間』岩波書店, 1970)。

ダニエル, I.P.「美の体系と経済的ビタミン ― キューバ観光における文化の商品化と文化保存」(江口信清訳), 石森秀三編『観光と音楽』民族音楽叢書六, 東京書籍：125－152頁。

Decima Research 1991 a Report to the Caribbean Cultural Committee on Caribana 1990 Survey. Toronto: Decima Research.

Dunsmuir, Mollie 1989 The Meech Lake Accord: The Manitoba and New Brunswick Reports. Ottawa: Research Branch, Library of Parliament.

Eco, Umberto, V.V.Ivanov, and Monica Rector 1984 Carnival! Berlin: Walter de Gruyter & Co. (池上嘉彦・唐須教光訳『カーニバル！』岩波書店, 1987年)。

江口一久　1988「トロントにみる民族模様」(上, 中, 下) 読売新聞夕刊, 12月7、8、9日。

江口信清　1988「トロントのカリバーナ」季刊民族学44号：72－81頁。千里文化財団。

――――　1990　カリブ海地域農民社会の研究。八千代出版社。

Gatner, Joe A. 1985 Canadian Multiculturalism: The Development of a Federal Policy. Ottawa: Library of Parliament.

Huizinga, J. 1938 Homo Ludens (高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中央公論社, 1963)。

Jackson, P. 1988 "Street life: the politics of carnival," *Environment and Planning: Society and Space*, vol.6: 213-227.

Johnson, W. 1990 "Oka and Meech can teach lesson in national disintegration," *The Gazette* 紙, 7月21日, モントリオール.

Logan, Ronald 1991 "Immigration during the 1980s," *Canadian Social Trends*, Spring: 10-13.

Minister of Supply and Services Canada 1989 Immigration Act. Ottawa: Canadian Government Publishing Centre.

波平恵美子　1985　ケガレ。東京堂。

Nunley, John W. 1988 "Festival Diffusion into the Metropole," Nunley, J.W. and John Wallace ed. Caribbean Festival Arts, St. Louis: University of Washington Press: Chapter 6: 165-182.

Porter, J. 1965 The Vertical Mosaic. Toronto: University of Toronto Press.

桜井徳太郎　1982　日本民俗宗教論。春秋社。

Sharpe, R.G. 1985 "Visible Ethnic Minorities in Ontario and Toronto," Ethnicity in

Canada-International Examples and Perspectives. Alfred Pletsch (ed.). Marburg/Lalm: Im Selbstuerlagdes Geographishen Instituts der Universitat Marburg: 256-273.

Sivanandan, A. 1982 "From Resistance to Rebellion: Asian and Afro-Caribbean Struggles in Britain," *Race & Class*, vol.XXIII (2,3) : 111-152。

Toole, David 1987 "Playin' Mas," *EQUINOX*, vol.VI (2) : 58-67.

Turner, V.W. 1969 The Ritual Process--Structure and Anti-Structure. Chicago: Aldine (富倉光雄訳 『儀礼の過程』思索社，1976)。

Turner, V.W.(ed.) 1982 Celebration. Washington, D.C.: Smithonian Institute Press.

van Gennep 1909 Les Rites de passage. Paris: Emile Nourry (綾部恒雄・祐子訳『通過儀礼』弘文堂，1977。

Wuest, Ruth 1990 "The Tobber in the Trinidad Carnival," *Caribbean Quarterly*, vol.36 (3,4) : 42-53.

Young, Margaret 1985 Canada's Immigration Policy. Ottawa: Library of Parliament.

Summary

The aim of this article is to analyze why Caribana, Caribbean immigrants' festival in Toronto has grown so large in size only in 24 years since 1967 and has been accepted and supported as a national/international festival both by the Caribbean immigrants and other residents in Toronto. The author carried out a field research in Toronto during summers in 1987 and '91. This article is based upon the data collected through these research.

Festivals in general have power to create special condition which enables the participants to experience symbolic reversals such as social status, sex (male/female), and so on. In addition to that, participants can experience orgy during the festival, despite of difference in ethnic origin, sex, colour of skin, religion, social status, and the like. Caribana is a carnival in origin carried out mainly by those from the Caribbean society, which has been consisted of various ethnic groups. Toronto is the place where most immigrants desire to reach. It is quite a cosmopolitan space where more than 100 different ethnic groups reside. The society itself is structured as a vertical mosaic dominated by WASP, even though the Canadian constitution has appealed multiculturalism. The Caribbean immigrants have been socioeconomically and political-

ly discriminated even in Toronto.

However, Caribana has been functioning to diffuse the Caribbean culture and make all participants feel "weness," or "we are the same." This kind of phenomenon is very important to change a vertical mosaic into horizontal one (ideal social structure for Canada). The success of Caribana owes to some particular reasons: (1) Toronto has had a sociocultural base to accept Caribana because of its multiethnic character; (2) music diffuses easily across the boundaries of "race," ethnic groups, colour of skin, sex, nationality and so on, and shakes people from the bottom of their heart; (3) since its inauguration it has had public support at federal, provincial and municipal levels; (4) it has been carried out partly in an open space along streets where anyone can participate free; and finally the Caribbean immigrants and their offsprings have courageously and actively appealed their cultural heritage to the public. Because of its success, similar festivals have been held in various cities in North America.

In the near future the author would like to compare Caribana to the Carnival in Notting Hill Gate, which has been often disturbed by racism. Moreover, the author has been carrying out a similar research on the Koreans' festival in "Ikaino," Osaka in order to compare to the Canadian case. The author thanks to the Government of Canada to give him a chance to carry out a field research in Toronto through 1990-91 Faculty Research Program Grant.